

Contents \*\*\*\*\*

特集：オバマ対ロムニーの終盤戦	1p
<先週の”The Washington Post”紙から>	
”Bob Dole on life after losing the 1996 presidential election”	
「ボブ・ドール、1996年大統領選敗戦後の人生」	7p
<From the Editor> 日米中、政権移行期の秋	8p

\*\*\*\*\*

特集：オバマ対ロムニーの終盤戦

「オバマ再選確率はどんなに高くても60%まで。それ以上の評価は、今の米国経済を甘く見ている。低い場合も50%まで。それ以下だと現職大統領に対して失礼である」

2012年米大統領選について聴かれるたびに、上のように答えてきました。ところが9月中旬から、「オバマ逃げ切り」ムードが強まってきました。これは勝負あったかと思われたところ、10月3日の第1回テレビ討論会ではロムニーがいいところを見せて踏みとどまりました。投票日まで残り1か月、まだまだ勝負は分かりません。

長かった戦いもいよいよ終わりが近い。終盤戦の情勢を確認してみましょう。

●何が起きるか分からない最終盤

野球に喩えるならば、ラッキーセブンの攻防はもう過ぎている。オバマが2点差でリードしていて、追う立場のロムニーが8回表に四球を連発して決定的な3点目を献上。試合の流れが一方的になったかと思われたところ、テレビ討論会でロムニーが貴重な1点を叩き出した。一度は席を立ちかけた観客も、あらためてゲームに見入っている。

この辺の勝負の綾は、いつものことながら intrade.com の「2012.PRES.OBAMA」を見るのが一番わかりやすい<sup>1</sup>。好事家たちがネット上で bet している仮想市場では、9月中旬から「オバマ再選株」がボックス圏（50%~60%）を上放れし、一時は80%近くにまで達した。ところが10月3日の第1回テレビ討論会を受けて、オバマ株は66%にまで急落している。終盤戦らしい勝負の激しさである。

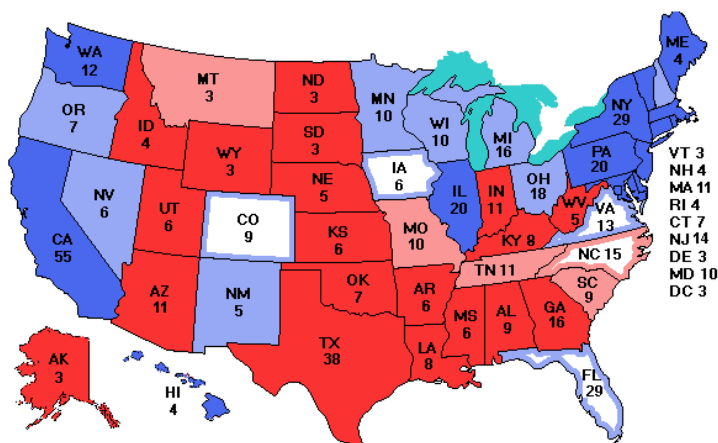
<sup>1</sup> [http://www.intrade.com/jsp/intrade/common/c\\_cd.jsp?conDetailID=743474&z=1349333896934](http://www.intrade.com/jsp/intrade/common/c_cd.jsp?conDetailID=743474&z=1349333896934)

## ○intrade.com で見えるオバマ再選確率



もっともここからロムニーが勝ちきえることは、けっして容易ではあるまい。これまた筆者が愛用している [electoral-vote.com](http://electoral-vote.com) の最新情勢を見ると、州ごとの世論調査を元にした選挙人の予想数は3ケタの大差となっている<sup>2</sup>。

## ○10/4 現在、オバマ 332vs.ロムニー206



ここからロムニーが最終勝利を収めるためには、選挙人の過半数=270 人に到達する必要がある。以下は単なる足し算の問題だが、

- (1) バージニア州 (VA 13) を逆転して  $206+13=219$ 、
- (2) フロリダ州 (FL 29) も奪って合計  $219+29=248$ 、
- (3) さらにオハイオ州 (OH 18) も押さえて  $248+18=266$ 、

と、大きな激戦州を3つ全部ひっくり返して、なおも選挙人が4人足りない。アイオワ州 (IA 6) かコロラド州 (CO 9) での勝利がさらに必要となる。残り1か月でこれら全ての条件を満たすのは、かなりハードルが高いと言えるだろう。

これまでのロムニー陣営は、どこかちぐはぐな戦いぶりが目立った。このままでは順当に「負けに不思議の負けなし」となりそうなところ、かろうじて「勝ちに不思議の勝ちあり」の可能性も首の皮一枚は残した、といったところか。

<sup>2</sup> <http://www.electoral-vote.com/index.html>

## ●よく似た個性、正反対のキャリア

10月3日の第1回テレビ討論会は、「内政問題」がテーマであった。議論の6つのパートに分かれていて、①経済（雇用）、②経済（財政）、③経済（社会保障）、④ヘルスケア、⑤政府の役割、⑥統治能力、であった。

CNNによれば、番組を見た人のうち 67%がロムニーの勝ち、26%がオバマの勝ちだと判定した。筆者も同感で、ロムニーが余裕のある態度で終始攻勢に出ている、議論の中身でもオバマを圧倒していたと思う。なにしろあの長い共和党予備選をくぐり抜けただけあって、細かな数字も頭の中に入っており、いかにも練習が足りている印象だった。

逆にオバマは集中力を欠いていた。まるで「俺はこんなところに居たくはないんだ」と言わんばかりの不機嫌さに見えた。反撃も手控え気味で、ロムニーの弱点である「過去の失言」や「税記録の未公開」などに言及することもなかった。もともとディベートが得意ではない上に、4年間も「実戦」から遠ざかっていたこともあるだろう。

ディベートを見て感じたのは、この2人は似た者同士だということだ。51歳対65歳と、年齢は一回り以上も離れているけれども、ともにハーバード大卒の秀才である。感情よりは知性が前に出るタイプで、実務家肌の中道穏健派。政治家としては羞恥心が強く、出世の邪魔をしているところまで妙に似通っている。

まったく正反対なのは2人の人生のキャリアである。オバマは社会運動家（Community Organizer）から弁護士、大学講師となり、そこから地方議員になった。民間企業で働いた経験はほとんどなく、ずっとパブリックセクターで生きてきた人である。これに対し、ロムニーはビジネスマンであり、企業再生をいくつも手掛けて大富豪になった。解決すべき問題を求めるかのようにソルトレーク五輪大会の会長を引き受け、その延長で政界に入ってきた人物である。こちらは徹頭徹尾プライベートセクターの人生なのである。

この前歴が、二人の考え方を対照的なものにしていただろう。本誌の8月24日号「ロムニー／ライアンという選択肢」で詳述した通り、今回の大統領選挙は極めて分かりやすい政策の軸ができています。「雇用か財政か」の二者択一の裏側には、経済思想の違いとともに、両候補の人生観の違いも隠れているのだろう。

## ○オバマとロムニー、政策の比較

オバマ＝バイデン	主要政策	ロムニー＝ライアン
雇用拡大（ただし失業率は8%台）	中心テーマ	財政規律（ただし増税には反対）
景気回復後に	歳出削減	直ちに実施
富裕層（2%）は増税へ	ブッシュ減税	富裕層も含め継続
継続	医療保険改革	廃止
経済が行き詰ったときは政府の出席（勝者総取りより成果の共有を）	経済思想	政府はなるべく民間に介入しない（政府依存より自己責任の社会を）

## ●いずれも大衆からは遠い指導者

二人の候補者の人生観の違いは、それぞれの失言の中に端的に表れている。

オバマは7月13日、バージニア州での遊説中にこんな「失言」をもらしている。

「もしもあなたが成功しているなら、誰かがそれを助けてくれている。あなたの人生には偉大な教師がいるだろう。あなたが繁栄できるこの素晴らしいアメリカ型システムは、誰かが作ってくれたものなのだ」

**「あなたがビジネスで成功したとしても、それはあなたが作ったものではない」** (*If you've got a business — you didn't build that.*)

「誰かがそれを可能にしてくれた。インターネットは自然に生まれたものではない。政府の調査がインターネットを生み、すべての企業が稼げるようになったのだ。要するに我々が成功するのは、個々人の努力のみならず、我々が共に行うからなのだ」

「個人の成功は、その人だけの力ではない（社会全体のお陰である）」という発想は、日本的な価値観から言えばほとんど問題なしとされることだろう。ところがこの発言が、**「オバマはやはり民間人の気持ちが分かっていない」**との批判につながった。「お金のために働いたことがなくて、経済の現場を知らないインテリ」「政府が一番偉いと勘違いしている」という印象を深めてしまったのである。

他方、ロムニーは5月17日にフロリダ州での大口資金集めパーティーで、こんな放言を収めたビデオが先月になって暴露され、一気に立場を危うくしてしまった。

「何が何でも大統領に投票する人が国民の47%いる」

「この47%は政府に依存し、自分たちは被害者で、政府は医療保険、食料、住宅などの面倒を見る責任があると信じている。政府に面倒を見てもらう資格があると信じている」

**「彼らは所得税を支払っていない。そんな連中を心配するのは私の仕事ではない」** (*These are people who pay no income tax. My job is not to worry about those people.*)

「彼らに自己責任を求め、自活するよう説得するつもりはない」

こちらは誰が見ても問題発言であろう。所得税を払っていない人が多いのは、臨時の減税措置が行われているからだし、そういう人たちも社会保障税や州税は払っている。「政府に依存している」というのは言い過ぎではないか。しかもロムニーは、国民の半分近くの人を気にしない、と言っている。およそ政治家にあるまじき配慮のなさである。

**2人の思考法はまさに正反対であるが、親しみを感じにくいエリート、という意味では共通している。**つまり、オバマはお高くとまった頭でっかちで、大衆から浮いた存在である。そしてロムニーは弱者に対して冷たく、人間味に乏しい金持ちということになる。

2012年選挙が今一つ盛り上がり欠けているのは、こうした両候補のキャラクターによるところが大きいのかもしれない。今後、両者のテレビ討論会は10月16日にタウンミーティング、10月22日に外交討論とあと2回行われる。**どちらが「親しみやすさ」を打ち出せるか、**が勝負のカギとなりそうだ。

## ● 結束した民主党、足並みそろわぬ共和党

投票日まで残り 1 か月ということで、両候補者の物量面も比較検討しておきたい。簡単に言ってしまうと、オバマ陣営のリードが鮮明である。

- まず「資金獲得量」で行くと、9 月末時点の比較オバマが 4.3 億ドル、ロムニーが 2.8 億ドルとなっている。すでに費消済みの金額はそれぞれ 3.5 億ドルと 2.3 億ドル、手持ち金額は 0.9 億ドルと 0.5 億ドルである。すなわちオバマが優勢である<sup>3</sup>。
- 次に「地上戦」についても、豊富な資金量と動員力を背景にオバマ側がリードしている。前述の激戦州における両陣営の出張事務所数は、以下の通りとなっている<sup>4</sup>。
  1. バージニア州は、オバマ 40 対ロムニー 29
  2. フロリダ州は、オバマ 80 対ロムニー 46
  3. オハイオ州は、オバマ 79 対ロムニー 35
- また「空中戦」においても、党大会が行われた 2 週間に流れた選挙スポット量を比較すると、オバマ側が全米で延べ 4 万回であったのに対し、ロムニー側は 1 万 8000 回にとどまっている<sup>5</sup>。

党内の結束力を比較しても民主党に軍配が上がる。8~9 月に行われた 2 つの党大会に対しては、「WE の民主党、I の共和党」（政治コンサルタントのデビッド・ガーゲン）と呼ばれるように、前者は「皆でオバマを盛り上げよう」と一致していたのに対し、後者はロムニーを持ち上げるよりも「俺が、俺が」という自己アピールが目立った。もともとその分、2016 年大統領選に名乗りを挙げそうな顔ぶれを考えると、共和党側はまことに多士済々であるのに対し、民主党側は「ポスト・オバマ」にふさわしい候補者が浮かびにくいようである。

さらに遠慮なく言えば、共和党は内部対立を修復できていない。ロン・ポールを支持するリバタリアンは、党大会になっても造反の動きを示していた。サントラム旋風を巻き起こした社会的保守派は、今は鳴りを潜めている。ブッシュ元大統領の一族やサラ・ペイリンなどの「著名人」は、今回の党大会に姿を見せなかった。そしてティーパーティーの勢力はなおも強力で、無視できない影響力を誇っている。

ロムニーがライアンを副大統領候補とし、「財政規律」を看板として構えた背景には、党内各派の主張にあまりにも差異があり、それ以外の論点では党内がまとまらないという事情がある。共和党の「自分探しの旅」はまだ終わっていないのである。

<sup>3</sup> <http://www.opensecrets.org/pres12/index.php>

<sup>4</sup> 東京財団「アメリカ大統領選挙 UPDATE」から

<sup>5</sup> 同上

## ●選挙結果と「財政の崖」問題

実も蓋もなく言うと、11月6日の結果として一番確率が高いのは、「オバマが再選、上院は僅差で民主党、下院は大差で共和党」の組み合わせであろう。と言うと、いかにも常識的でつまらない答えに思われるかもしれないが、米国経済にとって焦眉の急である「財政の崖」(Fiscal Cliff)から考えれば、無難な結果ということになるだろう。

この問題については様々な試算が行われているが、衆目の一致するところ「現状ベースでは、来年はGDP比3~4%の国民負担増が生じる」。以下はゴールドマン・サックス社によるものだが、「現状ベース」では来年の米国経済はマイナス成長に転じるかもしれない。GS社は、「ブッシュ減税は継続、給与減税等は失効、一律歳出削減は先送り」という予想を立てているようだが、いずれにせよ与野党の妥協が望まれる。

### ○Fiscal Cliffに関する試算

	現状ベース	GS社予測
ブッシュ減税失効(高額所得者)	830億ドル	0
ブッシュ減税失効(中・低所得者)	1980億ドル	0
給与税減税失効(Payroll-tax)	1200億ドル	1200億ドル
緊急失業給付失効	400億ドル	120億ドル
医療制度改革による増税効果	460億ドル	460億ドル
一律歳出削減(Sequestration)	900億ドル	150億ドル
合計額	5760億ドル	1930億ドル
対GDP比	▲3.6%	▲1.2%

その意味で、年末から年始にかけての政治日程は極めて重要である。11月6日の投票日が過ぎると、「レイムダック国会」と呼ばれる旧メンバーの議会が招集される。ここで妥協の機運が生まれるかどうか注目点だ。ところがロムニーが勝った場合には、いわばテイパーティの主張が通ったことになるので、財政問題で妥協することが難しくなる。また、閣僚ポストなどの人選にも時間がかかるので、ロムニー新政権の骨格ができる2013年春頃まで、一部の日程を先送りする必要があるようだ。

ところがここに新たな問題が発生する。2013年2月には、米国債の発行額が新たな上限に到達する見込みである。2011年夏には同じ問題で与野党が衝突し、政府が資金ショートする瀬戸際まで揉めて、やっとの思いで14.3兆ドルから16兆3940億ドルに上げた経緯がある。お陰で米国債の格付けが、初めてトリプルAから下がったことは記憶に新しい。

そのときの債務上限が、もう一杯になりかけている。つくづく2012年米大統領選においては、「財政の崖」問題が最大のリスクである。「11月6日から後が重要」であることを再び強調しておきたい。

## <先週の”The Washington Post”紙から>

”Bob Dole on life after losing the 1996 presidential election”

「ボブ・ドール、1996年大統領選敗戦後の人生」

September 29<sup>th</sup> 2012

\*大統領選の敗者には、どんな人生が待っていたでしょうか。1996年にクリントンに挑戦して敗れた、ボブ・ドール上院議員ご本人の筆による心温まる回想です。

<要約>

2007年1月、ジェラルド・フォードの葬儀にジミー・カーターが参列した。その日の様子を描いたマンガには、小さな子供が「ボク、大人になったら元大統領になる」とあった。

だが、負けた元大統領候補を尊敬してくれる者はいない。ワシントンでは、選挙に負けるのは死ぬようなものだ。家に閉じこもっていると、ときどき近所の人やマスコミが呼び鈴を押してこう言うのだ。「あなたのお陰でフォードは負けたと思いませんか？」

フォードと私のチケットが、カーター/モンデルに一敗地にまみれてから20年後、私は再び手を挙げた。そして1996年にクリントンに敗れてからは何度も、私は眠れないままにどうやったら勝てたのかと思悩んだものだ。共和党の地盤に頼り過ぎたのだろうか。文化的問題にこだわって、無党派層や郊外有権者を押しやったのだろうか。

ニクソン元大統領が1994年に亡くなる少し前、私にこう言った。「経済が良かったら、君はクリントンを倒しに行ったりしないだろうね」——その通りだった。いい時代であれば誰だって現職に投票する。だからと言って、私が出ないわけにはいかなかったのだ。

上院議員がなかなか大統領になれないことは、秘密でもなんでもない。それでも上院議員は負けても恵まれた立場だ。勝ち負けは政治家の常。フォード対カーター決戦の直後に、ハンフリー元副大統領候補は私にこんな風に言ってくれた。「ボブ、以前は私が君の立場だった。彼らにはスケープゴートが必要なんだよ。君でなければ、誰かが餌食になる」

彼は心を開き、私は彼の古い傷を共有した。そうやって、起きてしまったことは変えられないのだという事実を受け入れた。そしてゴールドウォーター、マクガバン、ジョン・ケリー、ジョン・マッケインなど、大統領になれなかった上院議員を次々と迎え入れた。

選挙に負けるのは辛いことだ。いや、それ以上だった。一日一日が貴重になる年代になって、最後は自己破壊に至る冒険に血道を上げたのだ。1996年選挙の敗北宣言で、「明日は私の人生で初めて、何もすることがない日になる」と述べた。それは間違いだった。選挙終了から72時間後には、私はデイビッド・レターマンの深夜ショーに出ていたのだ。

あの人は面白い人だ、ということが知れ渡って、思いがけず私はVISAカードやダンキンドーナツやバイアグラのCMに登場するようになった。(今でも空港などで奥様が駆け寄ってきて、「先生のお陰ですわ」と感謝されることがある)。私は政治ジョークの本を書くようになり、ブッシューゴア選挙の解説者を務め、カンザス大学にドール政治研究所を立ち上げた。今はワシントンの弁護士事務所で忙しい日々を過ごしている。

1997年1月、クリントン大統領は私に自由勲章を授与してくれた。私を打ち負かしたば

かりなのに、変だとは思わなかった。イーストルームに詰めかけたお歴々を前に、つい我慢できなくてこう言った。「いつかこんな歴史的な瞬間に、大統領から何かを頂戴する日を夢見てきました。本当は、ホワイトハウスの玄関の鍵を貰うつもりだったのですが」

その日、私は長らく停滞していた「第2次世界大戦に貢献した1600万人の犠牲者を称えるメモリアル」を建設する委員に任命された。そして数多くのボランティアとともに、個人や復員兵や政治家や企業などから1.75億ドル以上の寄付金を集めた。

1996年選挙がなければ、こんな機会はなかっただろう。ボスニアの行方不明兵捜索や、「9/11」の後などにも同じことが繰り返された。そして私は元厚生福祉長官のシャラーラとともに、兵士や復員兵、特にイラクやアフガンからの帰還兵の医療の質を、調査する大統領委員会の共同議長を務めることになった。

今でも毎日のように、困っている復員兵からの手紙が送られてくる。そのすべてに返事を書き、私の汚い字を判読するスタッフを悩ませている。毎日のように、兵士の誕生日を祝う電話をかけ、肉体や心に傷を負う帰還兵を励ましている。彼らの貢献に感謝をし、ときには私自身の戦争経験を分かち合うこともある。妻のエリザベスとともに、第2次大戦の名誉飛行士たちを、ワシントンのメモリアルに迎えるときほど嬉しいものはない。そして亡き戦友を想い、われらが青春を捧げて文明を守った戦いを思い起こすのだ。

仲間と共に思うことは、大統領選後の私の人生はなんと実り多いものであったかということだ。人生の恵みの最たるものは、けっして選挙人の数などでは測れないのである。

## <From the Editor> 日米中、政権移行期の秋

この秋は日米中が一斉に政局移行期を迎えます。そこでこの先の政治日程を作ってみました。この表を手掛かりに、今後の政局や外交を占ってみたいと思います。

### ○内外の政治日程

国内	海外
10/11 G7 (東京) 10/12-14 世銀 IMF 総会 (東京) 10/中旬 臨時国会召集? →解散? ① 10/28 補欠選挙 (鹿児島3区)	10/3 米大統領候補者討論会 (内政) 10/11 副大統領候補者討論会 10/16 大統領候補者タウンミーティング 10/22 大統領候補者討論会 (外交)
11月 与党税制改正大綱 11/下旬 →総選挙? ①	11/5-6 ASEM 首脳会議 (ビエンチャン) 11/6 米大統領・議会選挙投開票 11/8 中国共産党大会 (習近平総書記へ) 11/18 ASEAN 首脳会議 EAS (プノンペン)
12月 首相がロシア訪問 12/下旬、2013年度政府予算案決定?	12/19 韓国大統領選挙 12/31 ブッシュ減税が失効
1/中旬 通常国会召集 政府予算案提出、政府演説、代表質問 →解散②	1/2 歳出強制削減 (Sequestration) 発動 1/3 新議会が発足 1/20 大統領就任演説
2月 →総選挙②	2月中 新たな債務上限に到達(16.4兆ドル)?



まず解散のタイミングは、来週前半にも行われる党首会談がポイントとなります。野田首相は国会審議への協力を求めるでしょうが、自民党の安倍新総裁は「10月解散、11月総選挙」（①案）を求めるはず。民主党としては、来年度予算を編成して年明け通常国会に提出した上で、「1月解散、2月総選挙」（②案）のシナリオを模索するでしょう。

民主党としては、解散を回避するためには「臨時国会を召集しない」という裏技もあるのですが、それでは特例公債が出せないで政府が干上がってしまう。内閣支持率も低調が予想されるし、衆参における民主党議員の離党も相次いでいる。本誌としては、年内の解散を予測しておきましょう。

ちなみに③案として、来年7月の衆参同時選挙の可能性もないではない。しかし来年の参院選は、2007年に安倍内閣が大敗した時の逆襲戦であり、自民党側が現有議席を減らすことはまずあり得ない。逆に民主党は「衆参両方でボロボロに負ける」恐れがあり、この場合は党存亡の危機を迎えるかもしれない。③案はとてもお勧めできません。

もうひとつ、この秋は対中関係の問題があります。2010年の尖閣事案の後、日中の外交当局は東アジアサミットなどのフォーラムで「立ち話会談」を行い、そこから関係修復への糸口を掴みました。今回も、秋の外交日程が重要な意味を持つはず。とりあえず来週のIMF世銀総会には、中国から謝旭人財務部長などが出席するとのこと。

ただし中国側は11月8日から共産党大会が始まる微妙な時期なので、これらの外交日程に大物が出てくるかどうかは疑問が残ります。習近平次期体制は、発足早々に対日関係で地雷を踏むことを避けたいでしょう。また、中国側は今回の尖閣諸島国有化を「野田首相が石原都知事と示し合わせた茶番劇」とまで呼んでおり、このロジックを撤回して今の政権と関係改善をすることは考えにくい。

日中関係の改善があるとしたら、総選挙後、次期政権誕生後ということになる。経済への影響も懸念される場所ですが、長期戦を覚悟すべきでしょうね。この秋はまことに多事多難です。

\* 次号は2012年10月19日（金）にお届けする予定です。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)